SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

技術部広報誌の作成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江上, 智恵, 神尾, 恒春, 高柳, 正勝, 増田, 幸直, 井上, 直已, 水野, 武志, 喜多野, 哲也, 嶋田, 陽子, 服部, 貴寿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009261

技術部広報誌の作成

○江上 智恵[1)]、神尾 恒春[2)]、高柳 正勝[3)]、増田 幸直[4)]、井上 直巳[5)]、水野 武志[6)]、
喜多野 哲也[3)]、嶋田 陽子[2)]、服部 貴寿[7)]
（技術部　静岡大学技術部　[1)] 教育支援部門、[2)]ものづくり・地域貢献支援部門、[3)]情報支援部門、[4)]フィールド支援部門、[5)]教育研究支援部門、[6)]共同研究支援部門、[7)]プロジェクト・安全衛生支援部門）

１．はじめに

1.1 技術部の全学組織化と 2014 年度技術部目標

静岡大学技術部は平成 24 年 4 月に組織化し、現在 3 年目である。技術部が発足する前、技術職員は各部局に所属していたため、別々の部局に点在していた技術職員を一つの部局に集約した形になる。

技術部では、2014 年度の目標を「全学視野に立った技術部業務の見直しと業務の可視化」としている。これは、技術部ホームページ（以下、技術部 HP。URL は http://www.tech.shizuoka.ac.jp/）のトップページにも掲載している。

1.2 技術職員の認識について

1.2.1 別業務の技術職員の視点

そのような出自であるため、技術職員は自分の日常業務に関わらない技術職員のことをよく知らない傾向にある。組織化した現在でも、業務が異なる技術職員とは日常的に交流することはほぼない。技術職員は人事異動があまりないため、関わる職員も固定されてくる。さらに静岡大学はキャンパスが２つ（静岡キャンパス、浜松キャンパス）、フィールドが３つ（藤枝フィールド、南アルプスフィールド、天竜フィールド）あり、勤務するキャンパスやフィールドが異なる職員とは、接触する機会が非常に少ない。よって、他の職員の業務を知る機会は少ないと言える。

1.2.2 技術部外の視点

技術職員の認知度は低い。教員には技術職員の存在を認識してもらえるが、学生や事務職員、業者からは認識されていないことが多いのではと思う。理由は、「技術職員」という職種を知らない、技術職員の業務について知らない、知る機会がないためと思われる。技術職員が技術サービスを提供する対象は、教員か学生である。対象ではない事務職員や業者には認識されないことは致し方ない。

ちなみに、技術サービスの対象である学生からは、認識されていないこともある。認識されない理由は、教員と技術職員を混同している、「技術職員」という職種を知らない、などと考えられる。学生と関わる機会といえば学生実験での指導がその一つであるが、技術職員も実験や器具の使い方を指導しているため「指導している人＝先生（教員）」となってしまうようである。

また、他部局の教職員や外部の方からの視点では、技術部の実態がよく分からないようである。理由としては、様々なことが考えられる。まず、技術職員の詰所のような場所がないことが挙げられる。現在静岡大学技術部では、技術職員は直接各業務先に赴いているケースが多く、技術職員の居室は点々としている。次に、技術職員は電話での連絡がつきづらいためと考えられる。業務を複数持つ技術職員は、曜日や時間によって居場所が異なることがあり電話が取りにくい。学生実験や実習中は連絡が取れない。

技術部の職員は労務管理と業務先が別々であることも一因のようである。通常、他部局では労務管理先と業務先は一致しているため、労務管理と業務先が別であること自体を不思議に思うようである。

1.3 技術部広報担当者会議（技術部広報委員会）

静岡大学技術部では、技術部の広報活動について各部門の代表者が会議で決めている。この会議を技術部広報担当者会議と言い、日常では簡易的に「(技術部）広報委員会」と呼称されている。

技術部広報委員では、主に技術部 HP の内容についての審議・更新や、技術部業務の「見える化」活動を行っている。技術部 HP では、技術部案内、部門紹介、部門研修、地域貢献などの技術部や業務についての紹介や、技術部パンフレット(PDF 形式)、採用案内パンフレット(PDF 形式)の掲載をしている。技術部業務の「見える化」活動としては、部門紹介ポスターの作成と掲示、技術部広報誌の刊行などを行っている。部門紹介ポスターは各部門の業務内容を紹介するものである。平成 26 年 7 月より展示を開始し、静岡キャンパスでは静岡分室事務室前の廊下（写真 1)、浜松キャンパスでは工学部 1 号館 312 室前の廊下（写真 2）に掲示している。技術部広報誌の刊行については第２章より記述する。なお、技術部広報委員会では、他にもさまざまな技術部の広報活動等を行っている。

写真 1 部門紹介ポスター掲示の様子(静岡キャンパス）

写真 2 部門紹介ポスター掲示の様子(浜松キャンパス）

２．技術部広報誌

2.1 主旨

技術部広報誌の主な主旨は、技術職員の相互理解の推進である。

前述したとおり、技術部や技術部業務の認知度は低いが、これは業務内容の性質上致し方ないことである。そのため業務について知ってもらうには、こちらから発信する必要がある。ただし、淡々と業務を文書化して掲載するだけでは興味を持ってもらえず、折角作成しても手に取って読んでもらえないのではと考えられた。そのため、技術部の職員が興味を持ってもらえる記事を載せつつ、技術職員の業務も執筆してもらうことで、楽しみながら読んでもらえるものにすることにした。

2.2 公開範囲

まずは技術部内向けに作成することとした。理由は主に二つである。一つは、まず技術部内の職員同士で業務を理解し合うことが先決であると考えたためである。二つ目は、技術部広報誌の作成は今回初めての試みであるゆえ、ノウハウが無いためである。静岡大学内での公開は、今後目指す予定である。

2.3 作成担当者

広報誌の作成担当者は、第 1 号は広報誌発案者の水野武志氏が行った。第 2 号は筆者、第 3 号は服部貴寿氏が担当することとなった。

2.4 コンテンツ

広報委員会にて、技術部広報誌第 1 号、第 2 号、第 3 号のコンテンツは図 1（次ページ）のように決定した。主な構成としては　①はじめに　②挨拶　③News Topic　④メインコンテンツ（１つか２つ）⑤編集後記　である。News Topic は、最近行われた技術部の活動について掲載するコーナーである。

図 1 技術部広報誌のコンテンツ

技術部広報誌　第1号 （平成26年6月刊行）	技術部広報誌　第2号 （平成26年11月刊行）	技術部広報誌　第3号 （平成27年3月刊行予定）
・はじめに ・統括技術長挨拶 ・News Topic ・技術部新採用職員の紹介 ・各種委員会 委員名簿 ・編集後記	・はじめに ・広報委員長挨拶 ・News Topic ・各種発表報告 　・平成26年度北海道大学総合技術研究会 　・名古屋工業大学大第30回技術発表会 ・編集後記	・はじめに ・技術長挨拶 ・News Topic ・退職者の言葉 ・研修情報 ・編集後記

３．技術部広報誌の作成

技術部広報誌の作成について、コンテンツごとに記述する。

3.1 はじめに

広報誌の表紙に 4 行程度で書かれた文章である。主に技術部広報誌の主旨について記載している。

3.2 挨拶

第 1 号では、水野統括技術長より挨拶を賜った。「ようこそ静岡大学技術部へ」という題目で、主に新規採用技術職員に向けてのお言葉を執筆して頂いた。第 2 号では、神尾広報委員長より、「技術部の見える化」という題目で執筆して頂いた。まずは 2014 年度技術部目標「全学視野に立った技術部業務の見直しと業務の可視化」について触れ、広報委員で行った広報活動について記述してもらった。第 3 号では、江藤技術長へ「今年度を振り返って」という題目で原稿の執筆依頼をしている。

3.3 News Topic

第 1 号では、宮澤俊義氏より平成 26 年度 日本学術振興会のひらめき☆ときめきサイエンスに採択された「コケの中の小さな熊 ～地上最強生物クマムシの秘密を探る～」の内容について執筆して頂いた。第 2 号では、井上直巳氏より「「こどもみらいプロジェクト夏まつり in エコパ」のテーブルサイエンスに出展」について寄稿して頂いた。第 3 号では、平成 26 年度 静岡大学技術部 技術報告会についての記事を掲載予定である。

3.4 メインコンテンツ

第 1 号では、メインコンテンツは２つとなった。まず技術部新採用職員の紹介では、平成 25 年 4 月～平成 26 年 4 月より技術部に勤務することになった技術職員 9 名に、表 1 の項目を回答してもらった。⑦自己紹介　では趣味などの紹介も記入可とし、⑧抱負 についても個人的なことも記入可とした。そのため堅苦しさのない、新採用者の人柄がよく伝わる紹介文となった。

二つ目のメインコンテンツは、各種委員会 委員名簿である。技術部に関わる各委員会、過半数代表議員、衛生管理者などをまとめた。これらがまとめてある資料は意外に少ないため、周知するいい機会になったと思われる。

①採用年月日
②部門名
③氏名
④大学時代の専攻
⑤なぜ大学職員に？
⑥学生時代の技術部（技術職員）の印象
⑦自己紹介
⑧抱負など

表 1 新採用職員に回答してもらった項目

第2号のメインコンテンツは、各種発表報告であった。

平成26年度北海道大学総合技術研究会(平成26年9月4日～9月5日)、名古屋工業大学大第30回技術発表会(平成26年9月12日)に発表した職員9名に原稿を依頼した。執筆してもらった項目、原稿形式は表2のとおりである。

今回の原稿依頼において、執筆者よりご意見を賜った。

まず発表者9名全員への依頼は不要ではないか、という意見が寄せられた。原稿のページ数はA4 1/2～2ページまでとしているが、もし全員が2ページ執筆した場合、18ページにも及んでしまうのでは、と危惧されたためである。これについて広報委員会での会議では、ほとんどの方はA4 1/2ページほどと予想していた。そのため、記述項目①～⑥は9名全員に執筆して頂き、⑦情報交換会の感想 の項目は、5名に執筆してもらうこととした。なお、皆様から原稿を頂戴したところ、A4 1ページほどで書いて頂いた方が多かった。

記述項目
①部門名
②氏名
③日常業務の紹介
④発表題名
⑤発表内容（概要）
⑥発表・報告会の雰囲気
⑦情報交換会の感想（5名のみ）
原稿形式
A4　1/2枚～2枚　（写真・図）掲載可

表 2 発表者に依頼した原稿

次に、原稿に執筆者の顔写真を掲載してはどうか、というご意見があった。広報委員会で話し合ったところ、顔写真の掲載についての問題点が主に２点挙げられた。顔写真の掲載に抵抗がある方もいること、技術部広報誌はPDFで作成・公開しているため（紙媒体では刊行しない)、インターネットに流出する可能性があることである。そのため、顔写真の掲載は極力お願いをするが、強制しないこととした。

名前の掲載順についてご意見をもらった。この時すでに第2号は概ね完成しており、名前の掲載順はほぼ原稿の寄稿順であった。名前の掲載順にあたって原稿の順番も変更することになるが、原稿の順番を大きく変更するとレイアウトが大幅に崩れてしまう。いろいろ試したところ、執筆者の50音順では崩れなかったため第2号のみ50音順とした。その後広報委員で話し合い、第3号からは、技術部ホームページ掲載の名簿順を基本にするとした。

第3号では、退職者のコメントと研修情報の2つがメインコンテンツである。退職者のコメントでは、今年度の退職者の中の3名に執筆を依頼している。研修情報では、平成26年度内に技術部の職員が参加した研修（学内、学外問わず）について掲載する予定である。

3.5 他工夫など

広報誌第2号はMicrosoft Office Word 2013で作成した。

もくじを作成する際Wordの目次機能を利用したところ、PDF化した際にもくじにリンクがつき、クリック一つで閲覧したいコンテンツに飛べるので便利になった。また、今年度より静岡大学技術部のロゴが作成された（図2)。ヘッダーの左端に付けたところ、広報誌らしくなった。

技術部
Division of Technical Service

図 2 静岡大学技術部のロゴ

４．感想など

技術部での広報誌作成は初の試みであり、また筆者も広報誌の作成は初めてであった。第2号の取り纏め役を行うにあたり、いろんな意見を頂戴した。委員会でも広報誌については多くの時間を割いて話し合ったが、気づかないこともいろいろ出てくるものなのだと痛感した。第2号の反省は第3号に広報誌に取り入れており、よりよい広報誌ができると思われる。

筆者が聞く限りでは、広報誌は概ね好評である。また、技術報告会でのポスターセッションでは、他大学の方にもお立ち寄り頂いたのが印象的であった。